

## 2013年度第1回研究会報告書

### 東アジア・東南アジア大陸における文化圏の形成と他文化圏との接触—タイ文化圏を中心として—

平成 25 年度第 1 回研究会

日時： 2013 年 4 月 6 日（土）午後 1 時 30 分から 6 時 30 分

場所： 東京外国語大学 AA 研棟マルチメディア会議室（304）

報告：

1. 奈良雅史（筑波大学大学院生）

「分散するコミュニティを移動する回族—中国雲南省におけるトランスリージョナルなイスラーム学習活動の事例から—」

2. 新谷忠彦（AA 研共同研究員）

「最近の調査から考える「言語」と「民族」— 南北間の移動と接触—」

#### 趣旨説明

歴史上、中国西南部に位置する雲南が大陸部東南アジアと交易を行う中で、中国系イスラーム教徒が大きな役割を果たしてきた。中国系イスラーム教徒は少なくとも 19 世紀以降、ミャンマーやタイ王国に定住しながら、雲南と綿密な経済・文化的つながりを保持してきた。中国では改革・対外開放政策が導入されてから、イスラームが復興する中でダアワ（宣教）運動が展開するようになり、タイ王国の中国系ムスリムなどにも影響を及ぼしている。この度の研究会では、雲南のダアワ運動について、現地調査をした奈良雅史氏に発表して頂いた。

また、タイ文化圏の諸言語にみられる南北の影響を明確にする作業の一環として、最近現地調査で収集したデータに基づいて、言語と民族の南北間移動について、新谷忠彦氏に発表して頂いた。（唐立）

#### 1. 「分散するコミュニティを移動する回族—中国雲南省におけるトランスリージョナルなイスラーム学習活動の事例から—」

本発表は、中国雲南省で地域を横断して行われるイスラーム学習活動の事例から、宗教に対して抑圧的な政治的状况にある現代中国において、回族の人々がいかに宗教活動を展開し、イスラームを発展させようと試みているのかを明らかにすることを目的とする。

「改革・解放」以降、宗教政策の緩和により、中国では宗教が急速に復興してきた。そうしたなか、1990 年代以降、「出哲瑪提（ジャマーアト訪問）」と呼ばれるイスラーム学習活動が活発化してきた。この活動は、ムスリムが自身の属するコミュニティの複数

のムスリムと別のムスリム・コミュニティに行き、イスラーム学習、ムスリムとの交流、宣教活動などを行うものである。

この活動の活発化の背景には、依然として宗教活動が政府の強い統制下に置かれているという状況がある。本発表で取り上げた昆明市では、イスラームの活動は政府公認のモスクに限定され、政府に制度的に管理されている。また、それを逸脱する活動は、当局の取り締まりを受ける危険性がある。一方、箇旧市沙甸区では、文革末期の沙甸事件の影響により、当局はイスラームの活動に対して寛容である。例えば、回族たちによりアルコール排斥運動が展開され、アルコールの不買が達成された。つまり、沙甸区ではイスラームが公共の場に拡がり、町全体を秩序化してさえいる。このように当局による宗教統制は、地域によって大きく異なる。

回族の人々は、ジャマーアト訪問により、昆明市のように当局の宗教統制が厳しい地域から、沙甸区のようにそれが寛容な地域へ移動し、イスラームを学習する。彼らはこうした地域間の移動により、当局に抵抗することも、取り締まられることもなく宗教活動を行うことを可能にする。さらに、2000年代以降の回族大学生による宣教活動の活発化を背景に、大学生向けのイスラーム研修会として大規模なジャマーアト訪問も行われるようになった。ジャマーアト訪問は、大学生を「宣教師」として養成することで、2つの地域の間での補完的な関係を超え、より多くの地域のイスラームの発展に寄与する可能性がある。

先行研究では、中国での宗教復興は自律性を保とうとする宗教集団とそれを統制しようとする国家とのポリティクスの中で進展する現象として捉えられてきた。しかし、本発表の事例で示したようにむしろポリティクスの回避が、宗教活動を持続的に行うことや宗教発展の可能性を開いているのである。(奈良雅史)

## 2. 「最近の調査から考える「言語」と「民族」—南北間の移動と接触—

タイ文化圏においては「言語」と「民族」が必ずしも一致していない。また、ある「民族」自身の分類と他者からの分類も往々にして一致していない。

緬甸でカチン族とされている「民族」は、内部に相当大きな隔たりを持った多くの言語グループを抱えている。言語から見たグループ分けでは、マル、ラシ、アッツィ、ゴーチャン等はビルマ語系に分類され、リスはロロ語系に分類され、カク、ガナン、ドゥレーン等はジンボ語系に分類される。また、ラワンとされるグループは内部に大きな隔たりのある多くのグループを抱えている。このように言語が大きく異なるグループを「カチン族」として結び付けているものは一体何なのであろうか。内的にも外的にも彼らは「カチン族」というひとつの民族を成すものと考えられている。彼らの間にはジンボ語が共通語となっている。

「カレン」とされる「民族」は一般にはスゴー・カレンとポー・カレンを指すものと考えられており、また、彼ら自身もそのように考えている。一方、パダウンなどはカヤーの一部と考えられており、また、パオはカレンとは関係のない「民族」と考えられている。

ところが言語的に見れば、スゴー・カレンもポー・カレンもカヤーもパダウンもパオも、相互に親縁関係を持ったひとつのグループを成すことは明白である。彼らの間の共通語はない。

北方モン・クメール系のパラウン、ワ、プランは言語から見ればかなり近い関係にあるが、彼らがひとつの「民族」と認識されることはまずないし、彼ら自身もそのようには考えていない。また、同じ北方モン・クメール系のリアンはカレン族の一部とされている。彼らの間の共通語はシャン系の言語ないしは漢語である。衣装や集団生活の形態など、外部から目立つ存在のグループの言語は声調をもつものが少なく、外部から比較的目立たない（他民族との接触が濃厚な）グループの言語はおおむね声調言語である。

「チン族」とされているグループの言語は相互に非常に隔たりの大きなグループをたくさん含んでいるが、彼ら自身はひとつの「民族」を成すものと考えており、また、他者からもそのように考えられている。ところが、彼らの間にいくつかの有力な言語は存在するが、共通の民族名称はなく、また、広く普及した共通語はビルマ語以外にない。

同一「民族」内で言語の隔たりがさらに大きなグループはナガ族である。ところが、彼らはひとつの「民族」を成すものと認識しており、他者からもそのように考えられている。いくつかの有力な言語はあっても共通語のようなものはない。

これまでの調査研究により、カレン語とラワン語の間にかかなり深い関係があることが分かっており、また、ビルマ語とマル語、ラシ語等との関係から、イラワジ河沿いに起こった北から南への民族移動が推定されている。さらに、カレン語と北方モン・クメール系のリアン語、カノ語との間の借用語関係も明らかになり、カレン系民族の移動・接触の歴史を推定することが可能になってきた。

最近、ナガ語の一部が他のナガ語よりもジンポ語に近いことが分かってきた。こうした方向の調査研究を進化させることによって、この地域における「民族」形成の過程を解明する手がかりになるものと期待される。（新谷忠彦）

各発表に対して活発な質疑応答がありました。奈良氏の発表については、国家の政策や関与が回族の宗教活動に与えている影響や沙甸事件が何故起きたのかといったことに集中した。また、国家統制のなかで、大学生がなぜジャマーアト訪問に参加するのかが議論の中心になった。（唐立）

-----  
当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.  
-----